

医療職を目指す多専攻の学生が履修する「介護実習」の学び

安原由子, 關戸啓子

(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)

1. はじめに

看護職, 診療放射線技師, 臨床検査技師を目指す学生たちが学習している保健学科では, 学科共通の選択科目として「介護実習」を開講している。将来, 人に対して援助的に関わることが求められる学生たちではあるが, 核家族化などの影響からあまり高齢者と接したことがない学生も多い。そこで, 入学の早い時期から高齢者に接して, 人に援助的に関わる体験ができるように学科開設時から設けられている科目である。

開講して本年度で9回目の実習を全て無事修了することができた。来年度から10年目に入るのを契機に, 今後の授業改善に役立てたいと思い, これまでの実習方法と効果を振り返りまとめたので報告する。

2. 「介護実習」の概要

1) 実習目的

医療福祉施設における職員の活動状況を見学することや, 高齢者に接することによって, 医療福祉施設の役割を学び, 高齢者の生活の様子を知る。

2) 実習目標

- (1) 学習者にふさわしい態度で積極的に実習に取り組む。
- (2) 医療福祉施設の役割の概要が述べられる。
- (3) 医療福祉施設における各職種職員の役割の概要が述べられる。
- (4) 介護の実際を体験的に知る。
- (5) 高齢者の生活の様子を知り, ケアを必要とする高齢者への理解を深める。
- (6) 高齢者とコミュニケーションを取る。

3) 単位, 時間数, 実習期間

1単位, 45時間, 9月に1週間の集中実習

4) 実習学生

開講学年は看護学専攻1年生, 放射線技術科学専攻2年生, 検査技術科学専攻2年生である。

※年度ごとの実習参加学生数は表1のとおり

5) 実習方法と日程

5～8人程度のグループに分かれて, グループごとに指定された実習施設で実習を行う。実習先では, 実習施設の日課に従って, 職員とともに, または職員の指示に従って高齢者に接する。

1日目: 実習のオリエンテーション

2～4日目: 現場実習

5日目: 実習のまとめと反省, 全体発表会

6) 実習記録と評価方法

現場実習中は, 「毎日の記録」(資料1)を1日に1枚書いて提出する。実習全体からの学びは「介護実習のまとめ—個人用—」に書く。実習グループで話し合った内容は「介護実習のまとめ—グループ用—」に書く。評価は実習目標の到達度等のみをみて, 実習担当教員が行う。

3. 「介護実習」の工夫点

3専攻の援助技術を学習していない学生が実習を行うため, 実習施設はなるべく要介護度が高くない高齢者が利用する施設を選定し, 施設職員とともに行動させてもらえるように, 事前の打ち合わせを綿密に行っている。1～2グループに1人の指導担当教員が付き, 指導体制を整えている。

また, 3専攻の学生が交流できるように, 可能な限り専攻が偏らないようにグループわけを行っている。履修する学生には, 実習前に「介護実習」のオリエンテーションを数回に分けて実施して, 実習準備を十分に行っている。加えて, 実習グループを担当する教員からも, グループごとの事前オリエンテーションを実施している。

4. 「介護実習」の学び（調査方法と結果）

「介護実習」の学びを明らかにするため、実習記録（「介護実習のまとめグループ用」）の分析とアンケート調査を実施した。2010年9月に実習した学生17人に研究協力を依頼した。学生に、研究の趣旨・協力は自由意思であること・協力の有無は成績とは無関係であること・プライバシーは守られること・研究結果は発表されることを説明した。その結果、実習記録については全員の学生から承諾が得られた。アンケートは看護学専攻の学生のみ依頼し、13人から承諾が得られた。

1) 実習記録より

学生の記録の中から、介護実習の学びについて書いてあるところを、1文1内容となるように取り出した。意味内容の類似したものを集めて分類し命名した。その結果、「施設の役割」「職員の役割」「安全への配慮の大切さ」「利用者にとっての施設の意味」「利用者を尊重する気持ち」「コミュニケーションの難しさと大切さ」が実習の学びとして抽出された。

2) アンケート結果より

13人のアンケート調査の結果、「介護実習」に「満足」と11人、「やや満足」と2人が回答した。「今後役立つ」と「思う」と11人、「やや思う」と2人が回答した。「実習目標の達成」は「できた」と8人、「ややできた」と4人、「どちらともいえない」と1人が回答した。

5. 考察

実習記録の分析から得られた学生の学びは、ほぼ実習目標と一致しており、実習の目的・目標に合致した実習になっていることが示唆された。そのなかで、学生はコミュニケーションの難しさを感じていることがわかった。3日間という短い実習期間では、高齢者と良いコミュニケーションを実践できるまでには至らなかったようである。これについては事前の対応が必要と考えられる。しかし、難しさに気づけたことは次の学習につながると思われる。アンケート結果でも、介護実習に「不満足」、「今後役立つ」と回答した学生はおらず、介護実習の必要性は高いと考えられた。

6. 介護実習の今後の課題

今回の分析結果から、現在の介護実習の意義は大きいことがわかった。今後は、学生がコミュニケーションが難しいと感じている内容を明らかにして、事前学習を行うなど、介護実習がより充実したものになるように工夫をしていきたい。

表1 年度別実習参加学生数（人）

実習年度	性別	看護学専攻	放射線技術科学専攻	検査技術科学専攻	合計
2002年	男	2	2年生	2年生	2
	女	6	いない	いない	
2003年	男	5	1	1	16
	女	4	2	2	6
2004年	男	8	1	0	22
	女	3	4	1	6
2005年	男	9	5	1	15
	女	0	0	0	7
2006年	男	4	2	1	7
	女	9	1	0	10
2007年	男	2	0	0	2
	女	3	0	4	7
2008年	男	0	7	0	7
	女	3	0	5	8
2009年	男	2	1	0	3
	女	1	0	2	2
2010年	男	0	1	0	1
	女	1	0	0	1

注)2002年～2005年は看護学専攻のみ必修科目であった。

【資料1】

毎日の記録

学生番号：	専攻：	氏名：
年 月 日 曜日	実習 日目	実習施設：
本日の行動	8:30---10:00---11:00---12:00---13:00---14:00---15:00---16:00	
実習の学び・反省・感想等		

